

福岡市とその近郊における乳歯う蝕罹患状況の15年間の推移 第1報 とくに歯種別罹患状況の変化について

Changes of Caries Prevalence of Deciduous Teeth for 15 Years in Fukuoka, Analysis of Caries Prevalence by Kinds of Teeth

菅原武道 大塚政公 越智玲子
 中村譲治 御手洗聖史* 筒井昭仁*
 境 脩*
 Takenori SUGAWARA, Seikou
 OHTSUKA, Reiko OCHI, George
 NAKAMURA, Yasusi MITARAI,*
 Akihito TSUTSUI,* Osamu SAKAI*

目的： 戦後増加の一途をたどった乳歯う蝕は、最近になって減少しつつあると言われている。しかしこの減少傾向に関する報告は少ない。著者らは先に1975年より1988年にわたり福岡都市圏の幼稚園における乳歯う蝕罹患状況の経年的推移について¹⁾²⁾報告した。今回1988年以後1991年までの推移に関しさらに追加検討を行なったので報告する。

対象および方法： 福岡市とその近郊の保育園、幼稚園の3歳児、4歳児、5歳児を対象とし1975年から1991年まで毎年1回春に検診を実施した。調査人数は延べ15,793名である。口腔内診査は視診型にて島田の基準に基づき歯面別に行った。検診者間のmethod errorを防ぐ為に、事前に抜去歯牙を用いてトレーニングを行った。今回解析にあたって調査期間15年のうち1976年、1981年、1986年、1991年の延べ2,923名のデータを6施設について抽出し、def-t, def-s, および歯種別罹患状況を分析した。解析にはApple社のMacintosh IIを用いた。

結果および考察： 4抽出年における3才児、4才児、5才児の対象者数、う蝕罹患状況をTable 1に示した。def s率は1976年の4歳児において90.4%であったものが1981年には82.2%と有意に減少している。同様に5歳児において95.6%であったものが

1986年には85.4%にと有意に減少している。しかし両年齢とも以後減少傾向はみられたものの有意ではなかった。3歳児においては15年間で変動はあるものの1976年と1991年の間には有意な減少は認められなかった(Fig.1)。またTable 1, Fig.2に4抽出年における年齢別def-t index, def-s indexを示した。def-t indexは1976年の4歳児において7.9本であったものが1981年に6.4本、1986年に5.4本と有意に減少しているが以後は変化が見られない。5歳児では1976年に9.9本であったものが1981年に7.6本、1986年に6.5本と有意に減少しているが以後変化は見られない。3歳児においては1976年に4.0本であったものが1991年に3.3本と減少はしているものの有意差は認められなかった。さらにTable 1, Fig.3に各年度におけるd-t, e-t, f-tの内訳を示した。サホライド塗布がなされた歯牙において明らかにう蝕の進行が抑制されていると判断されたものをサホcとし処置歯と判定した。1976年の5歳児において未処置歯が6.6本であったものが1991年には2.2本に、要抜去歯が0.8本であったものが0.0本に減少している。逆に処置歯は2.5本から4.2本へと増加している。同様に4歳児において未処置歯が5.7本であったものが1991年には2.1本に、要抜去歯が0.3本であったものが0.0本に減少している。逆に処置歯は1.9本から3.1本に増加している。3歳児においても同様の傾向を示した。Fig.4に5歳児の1976, 1991年における歯種別う蝕罹患歯率を示した。15年間で全体的に減少しているが、依然として上顎乳切歯部、乳臼歯部において高い罹患傾向にあることがわかる。また処置歯率に関しては1976年に上顎乳切歯部7.2%、上下乳臼歯部35.8%であったものが、1991年においてはそれぞれ55.6%、71.9%となっており、処置の割合が増加している。とくに上顎前歯部のサホライド塗布が処置歯率の増加に大きく関与していることがわかる。また下顎前歯部にもサホライド処置が増加している。さらに乳臼歯部において充填処置が増加している様子がわかる。

結論： 福岡市とその近郊における乳歯う蝕状況に関して15年間調査を行い、以下の知見を得た。

1. 乳歯う蝕は4歳児5歳児において1976年から1986年まで有意に減少したが、以後1991年まで変化は見られなかった。3歳児のう蝕罹患状況にはこ

福岡予防歯科研究会

* 福岡歯科大学予防歯科学教室

の15年間変化は見られなかった。

2. 乳歯う蝕の内訳を検討すると15年間で未処置歯の減少と処置歯の増加がみられ両者の割合は逆転していた。また要抜去歯はほとんど見られなくなった。

3. 歯種別罹患状況においては15年間で全体的に罹患歯率は減少しているが、依然として上顎乳切歯部および上下乳臼歯部において高い罹患傾向にあった。

Table 1 Number of children and caries prevalence in 1976,1981,1986,and 1991

year	age	number	def-t%	d-t	e-t	saforide applied teeth index	f-t	def-t	def-s
1976	3	37	59.5	2.6	0.1	0.1	1.2	4.0	7.1
	4	314	90.4	5.7	0.3	0.2	1.7	7.9	15.7
	5	272	95.6	6.6	0.8	0.2	2.3	9.9	22.5
1981	3	66	71.2	3.4	0.0	0.0	0.5	3.9	7.7
	4	365	82.2	3.9	0.1	0.5	1.9	6.4	12.6
	5	342	90.6	4.1	0.2	0.5	2.8	7.6	17.6
1986	3	76	55.3	1.9	0.0	0.5	0.8	3.2	4.7
	4	331	78.5	2.8	0.0	0.5	2.1	5.4	10.2
	5	376	85.4	2.9	0.1	0.5	3.0	6.5	13.9
1991	3	111	59.5	1.6	0.0	0.4	1.3	3.3	5.7
	4	334	74.0	2.1	0.0	0.4	2.7	5.2	10.4
	5	299	81.3	2.2	0.0	0.7	3.5	6.4	14.3

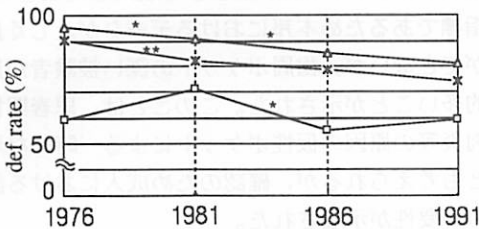


Fig.1 Caries prevalence rate of 3,4, and 5 year-old children from 1976 to 1991

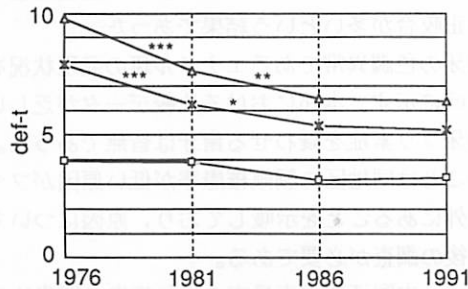


Fig. 2 def-t index of 3,4, and 5 year-old children from 1976 to 1991

た。処置の割合は上記部位に特に増加していた。

4. 上顎前歯部の処置状況の改善にはサホライド塗布が大きく関与していた。

文献

- 1) 森田知典, 柏木伸一郎, 三浦喜久雄, 他: 福岡都市圏の幼稚園における乳歯う蝕罹患状況の経年的推移について, 口腔衛生会誌, 34; 68-69, 1984.
- 2) 森田知典: 福岡都市圏の幼稚園における乳歯う蝕罹患状況の経年的推移について(第2報), 日本小児歯科学会九州地方会抄録, 1988, 21頁.

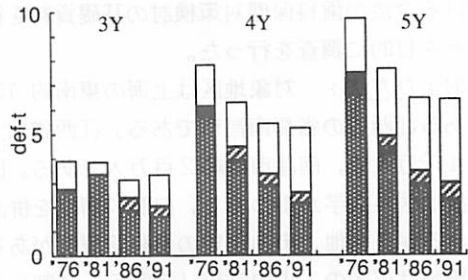


Fig.3 def-t index with components of 3,4, and 5 year-old children from 1976 to 1991

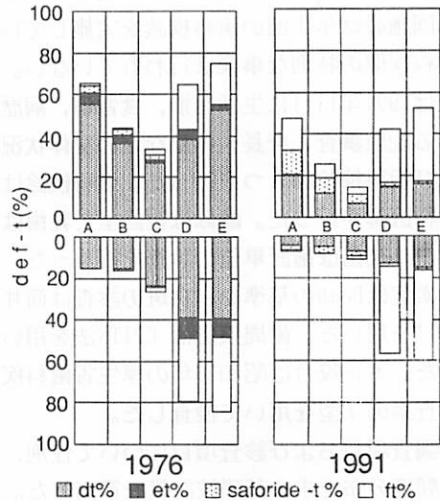


Fig. 4 def-t rate with components by kinds of teeth of 5 year-old children 1976 and 1991

索引用語: 疫学, 乳歯う蝕, 年次推移

Key words: Epidemiology, Children, Dental caries

著者への連絡先: 菅原武道, 〒810 福岡県福岡市中央区大名1-15-24Well-Being BLDG 2F 福岡予防歯科研究会
電話 092-771-5712